

開業医生活18年

昨年編集委員長の高橋さなみ先生から、「先生がシリーズ開業をまだ書いていないことに気づいてしまったので原稿をお願いしますか？」とご依頼されました。神皮の中でもシリーズ開業のコーナーは毎号楽しみに読ませていただいています。開業された先生方の苦労話や奮闘記を読んで、自分が開業した頃の苦労や喜びを重ねつつ、開業してからすでに17年も経過しているの、だんだんその頃の記憶も年齢とともに曖昧になってきていました。今回、折角の執筆の機会をいただきましたので、開業したばかりの新米開業医の奮闘記でなく、だいたい年季の入った開業医の雑感になりますが、これから開業しようと考えている先生方の背中を後押しする、もしくは思いとどまるお話になればと思い筆をとりました。

私は1997年に聖マリアンナ医科大学を卒業し、そのまま母校の皮膚科学教室に入局しました。なぜ皮膚科を選んだのかというと、大学6年の皮膚科の講義で、当時国立がんセンター皮膚科にいらした故石原和之先生のお話を聞いて衝撃を受けたからでした。恥ずかしながらそれまで皮膚科の講義を真面目に聞いたことはなく、皮膚科のポリクリのときも同級生と多摩川でバーベキューをしていたという、今では考えられないような問題医学生でしたが、さすがに国試前の6年生のときは講義を真面目に聞いていました。そこでメラノーマの患者の剖検のスライドで、脳や肺、肝臓が真っ黒になっているのを見て、なんと恐ろしい病気なんだ！と衝撃を受け、これを診療、研究してみたいと急に思い立って皮膚科に行く決意をしました。そこで当時教授だった故溝口昌子先生の元を訪ね、「メラノーマのことを勉強したいのですが、国立がんセンターの皮膚科で研修し

**渡部秀憲**

はるひ野皮膚科クリニック
(川崎市麻生区)

てからこちらに戻ることも可能ですか？」と無謀にも伺ったところ、「まずはうちの医局に入って皮膚科全体を勉強してみて、さらに専門性を高めたければいつでもがんセンターに行ってもいいですよ」と言われ、教授の甘い言葉に誘惑され入局しました。悪い意味ではなく、恩師の溝口先生の診療は今でも私の診療のお手本で、本当に入局して良かったと思っています。同期には横須賀市で開業しているすずらん皮膚科クリニックの松岡晃弘先生、瀬谷区で開業しているせや皮膚科クリニックの布施恵理先生、東京都港区で開業している今泉スキンクリニックの今泉明子先生がいます。同期4人の中で最も開業に向いていなかったのは誰？という質問には、おそらく当時の医局の先生方は渡部と答えるのではないかと思います、なんと同期で最も早く開業したのは他ならぬ私でしたので、人生とは分からないものです。

開業すると診療だけでなく、労務管理や経営など勤務医のときにはなかった苦労があります。診療はなんとかなりますが、労務や経営など好むと好まざるとに関わらずやらなければなりません。このあたりは他の人に任せている先生方もいるかと思いますが、当院のような弱小クリニックでは院長が全てやることになります。元来他人を注意したりするのが苦手な私は労務管理には向いておらず、毎年の納税に四苦八苦している状況では、経営が順風満帆とは言えず向いているとも思えません。じゃあなんで開業したの？と問われると勢いで、と答えるしかなく、今になって思えばお粗末な限りです。

大学での話に戻りますが、入局してからあまり真面目な医局員ではなかったと思います。というのも、当時の教授外来や准教授（当時は助教授）外来



溝口先生、Dr. Vincent J. Hearing と

では、新人はベシュライバーを担当していました。あらかじめ患者の問診を取ってきて、教授や准教授の前でプレゼンすることが通例となっていました。問診票を見ると、この人は腫瘍かな、こちらは炎症疾患かな、と大体想像できます。当時は臨床診断がつかなくてもとにかく生検するという方針でした。自分が生検した患者は病理カンファでプレゼンすることになるので、臨床診断がつかない炎症疾患を生検すると、プレゼンが大変なことになるのは日常茶飯事でしたし、Lever's Histopathology of the skin（入局のお祝いで贈呈される）を鑑別診断を含めて一通り目を通していないと怒られるはめになるので大変でした。そんなこんなで入局してしばらくすると悪知恵が働き、特に仲が良かった布施先生には、この人（炎症）の問診は先生が取ってきて、こっちの人（腫瘍）は私が取りに行くから、と自分に腫瘍が回ってくるように誘導していました。布施先生本当に申し訳ありませんでした。

そうこうしているうちに研修医が終わり、大学院に入学する時期となりました。その頃になると自分は手先が不器用で手術は向いていないと自覚するようになり、メラノーマの手術を手掛けるのは無理かなと思い始め、なにか他に面白いことはないかな？と考えていました。皮膚科の大学院に入学できるのは年に3人までという規定がありましたので、同期4人で今年誰が行くか相談していたところ、松岡先生が「レディーファーストでいいんじゃない」という紳士ぶりをみせ、私と松岡先生は1年遅れで大学院に入学することになりましたが、大学院に入る前から研究室にはちょくちょく出入りしていました。当時の医局の研究テーマはアトピー性皮膚炎か色素

細胞でしたので、メラノーマ繋がり？で色素細胞の研究を始めました。ほぼ毎日培養細胞と向き合っている地味な生活でしたが、大学院1年目にJ Invest Dermatol (JID) に、2年目にも同じくJIDに論文を投稿することができました。2年目の終わり頃に、アメリカのNational Institutes of Health (NIH) の色素細胞部門に留学していた先輩が帰国するので代わりに行かないか、という話があり、是非にということで3年目はNIHに留学することになりました。留学して1年目にJ Biol Chemに投稿することができ研究はますます順調でしたが、まだ大学院生でしたので大学から給料はもらえず、逆に学費を払わなければならないという金銭的に苦しい状況でした。見かねて大学の研究科長でもあった溝口先生の計らいで大学院の規則を改定していただき、聖マリアンナ医科大学で初めて3年で大学院を卒業することができました。これもひとえに留学を応援していただいた医局の先生方や、学位審査のため一時帰国を快く許してくれたボスのDr. Vincent J. Hearingの協力があったので大変感謝しております。

溝口先生が退官するということが2年半の留学生活を終えて帰国しました。帰国後は専門医取得のため診療を中心とする生活に戻り毎日を過ごしていましたが、無事専門医も取得し、これからどうかと悶々と考える時間が多くなりました。今になって思うと燃え尽き症候群だったのかもしれません。

ふと、今まで考えたこともなかった開業というワードが頭に浮かびました。ちょうど後輩の住んでいたマンションの隣に医療モールができるらしいという話を聞いて、家族を連れてはるひ野まで見に行き、なんとなく開業もいいかなと思い開業しました。

最初の話に戻りますが、同期でお前が一番開業に向いていなかったと言われる所以は、大学病院だけで関連病院での診療を経験していないので、いわゆるcommon diseaseを診れるのか？という指摘と、そもそも診療するより研究しているほうが向いているんじゃないか？という指摘からです。今になって思うとごもっともな指摘でまさにその通りです、ということになりますが、勢い？ 情性で開業してしまい、早18年目に突入してしまいました。そんな浅い理由で開業しても一応なんとかなるものです。早くに開業して良かったことは、体力的にまだ

大丈夫だったので、無謀な開業でもなんとか乗り越えられたことと、開業してから患者さんと向き合う時間が増えて、遅ればせながら皮膚科の奥深さを実感し、臨床が本当に好きになったということです。

こんな私でも開業できましたので、これから開業しようと考えている先生方はどうぞ不安にならずに開業なさってください。開業はもうすこし臨床を勉

強してからじゃないと、と考えている先生方には、私の経験からそれは正しい考えだと思います。一人ひとりの患者さんから得られることは教科書だけでは決して知ることのできない学びだと思います。臨床経験を積んで是非自信を持って開業してください。

開業奮闘記

2021年11月に横須賀市の京急田浦駅近くで、こもれび皮膚科を開業しました。

私は山口大学医学部を卒業後、2008年に横浜市大皮膚科へ入局し、横浜国立大学附属市民総合医療センター、横浜国立大学附属病院、横須賀共済病院、神奈川県立こども医療センター、横須賀市立市民病院で働かせてもらいました。大学病院で全身管理が必要な疾患の治療、特殊な検査、学会発表などを勉強し、地域の中核病院で多くの症例を経験し、小児専門病院では血管腫等の治療、教科書でしか見たことがなかった貴重な症例を経験させてもらいました。横須賀市立市民病院では地域柄、ご高齢の方を多く診察させていただきました。どの病院でも感じていたことですが、症状が落ち着いた後、病院からクリニックへ紹介させていただきたいというお話をすると、（特にご高齢の方で）慣れた外来にこのまま通院することを希望されて心苦しい思いをしていました。また、こんなことで受診していいのかと迷っただけけれど……という声もよく聞きました。いつの頃からか、いつでも、どんな症状で受診してもいいですよ！ と患者さんへ声をかけたくなり、開業を考えるようになりました。

開業を決めて退局したもの、なかなか物件が見つからず途方にふけていたところ、以前一緒に働いていた先生から耳鼻科の先生がクリニックビルを建てるのだけれど、そこにテナントで入ってくれる皮



高瀬奈緒

こもれび皮膚科
(横須賀市)

膚科を探している、というお話をいただきました。場所は横須賀市船越町、京急田浦駅の近くとのことでした。時々当直に行っていた横須賀共済病院の分院（現在は閉院、元北部共済病院）の近所です。当直明けの朝、横須賀共済病院へ戻る際に時間指定侵入禁止の小道に間違えて入り、警察の取り締まりにあった苦い経験が頭をよぎりましたが、自宅からの距離も子どもの学校からの距離も絶妙にちょうどよく、有難くこのお話をお受けすることにしました。

私は経営も何も全くわからず、漠然と開業はコンサルタント会社さんにお任せするものと甘く考えていました。開業場所が見つかり、資金借入についてはオーナーの先生が銀行を紹介してくださり、内装は外の建物をつくる地元の建築会社さんをお願いすることになりました。内装はクリニック内装の専門業者さんへ一度見積もりをお願いしたのですが、費用が2倍近くだったことと、建物が完全に完成してからの着工になるということで開業日がオーナーの先生のクリニックと大幅にずれてしまうため予定通りの建設会社さんをお願いすることにしました。内装は私の意向に沿ってくださるとのこと、私と夫が自宅で相談しながら鉛筆で図面を書いたものを打ち合わせに持って行きました。扉の開き口などの微調整はありましたが、あの鉛筆書きがほぼそのまま採用されて現実のものとなっていて、未だにこれでもよかったのかわかりません。

事業計画も銀行の担当者の方に助けていただきながら作成し、いつのまにかコンサルタント会社さんへお願いするタイミングを失っていました。どうしても入れたかった自動精算機を探してメーカーさんを1人で尋ね歩いている間に、卸業者さんを介さないと購入できないというメーカーがありました。そこから今お世話になっている医薬品卸業者さんと知り合うことになりました。この時点で2021年8月、開業の3か月前でした。私の危機的状況に、すぐにスケジュール表を作ってください、求人、ホームページ作成、届出関係のお手伝いなどテキパキと進めてくれて本当に助かりました。9月には子どもが新型コロナウイルスに感染し、私は濃厚接触者として24日間自宅待機となり、一番忙しい時期に外出できず、10月は目の回る忙しさであまり記憶がありません。防火管理責任者講習に2日間出席した後、へとへとになりながらニトリで家具、ノジマ電気で電話機など購入し、閉店間際の餃子の王将で食べた夕食の味は忘れられません。

なんとかぎりぎりで開業にこぎつけた初日、何か忘れていたと思ったら、よりもよって白癬菌検出用試薬の「ズーム®」の発注を忘れていました。大急ぎで届けてもらうことにしましたが、1名だけ真菌検査が必要な患者さんが受診されました。とてもいい方（Aさん）で「買い物してから後でまたくるよ～」と言ってください、ことなきを得ました。Aさんはその後脳梗塞を発症しましたがリハビリ病院から退院して時々受診してくださいます。この2年半の間に結婚してもうすぐ出産するというアトピー性皮膚炎の女性もいらっしゃいます。

家族が増えたり、進学したり、就職したりと患者さんの人生をそばで見ているのは私にとっては本当にうれしいことで、開業してよかったと思う瞬間です。地域の皆さんの皮膚疾患による困り事を少しでも解消して、健やかな毎日を送るお手伝いができるようにこれからも努力していきたいと思っています。

瀬谷にて開業10周年

2014年12月に横浜市瀬谷区の相模鉄道本線の瀬谷駅南口駅前に「せや皮膚科クリニック」を開業いたしました。もうすぐ10年が経とうとしているところ大変遅くなりましたが、改めてご挨拶申し上げます。

私は、1997年に聖マリアンナ医科大学を卒業後、同大学皮膚科学教室に入局し、故溝口昌子先生のもとで勉強させていただきました。私にとって溝口先生は皮膚科医の鏡であり大師匠であります。厳しくも優しい聡明な先生のもとで皮膚科学と皮膚病理学を学ばせていただけたことは一生の宝物です。

その後同大学の大学院へ進み、メラノサイトの研究で当時の助教授の相馬良直先生の御指導のもと博士号を取得しました。2004年から都立駒込病院皮



布施恵理

せや皮膚科クリニック
(横浜市瀬谷区)

膚科へ出向、約2年間赤城久美子先生のもとで、AIDSをはじめとした感染症の症例を数多く勉強させていただきました。その後は聖マリアンナ医科大学病院横浜市西部病院皮膚科で村上富美子先生のもと、外来診療や多くの手術を学ばせていただきました。

2009年に長女を、2013年に長男を出産し、子育てをしながらの病院勤務でしたが、皮膚科当直のない西部病院の勤務は自宅からも近く、病児保育のある院内保育園も利用できました。環境の整った所で勤務で、色々な人たちに助けられながら充実した日々を過ごさせていただきました。当時支えてくださった方々に心から感謝いたしております。

聖マリアンナ医科大学病院横浜市西部病院は瀬谷

区の隣の旭区にあります。西部病院では瀬谷区在住の患者様も多かったので、「病状が安定したらかかりつけの皮膚科にかかってくださいね」とお願いしても、「瀬谷区で地元の皮膚科にかかろうと思って混んでいてなかなかかかれない」とおっしゃる患者様が多く、患者様を抱え込むことになってしまい困っていました。瀬谷区には、他科で開業をしている知り合いの先生が多かったこともあり、そのような先生方の後押しもあり、瀬谷区で開業をすることを決めました。

開業するからには、大学病院で治療を行っていた患者様の受け皿になれるよう、保険診療のできる限りの事はしようと思い、ナローバンドUVB、エキシマライトは開院時から導入しました。初め、ナローバンドUVBはクリニック規模ではあまり適応患者様がいなかったかもしれない、と思っていましたが、アトピー性皮膚炎、尋常性乾癬、尋常性白斑の患者様へ次なる治療選択として提案できるので、診療の際に控えめに話していても、その後患者様からやってみたいと申し出てくれることがあります。そうすると患者様が1週間に1回は通院してくださるので、毎週の皮膚の状態を診察でき、外用剤をちゃんと塗っているかのチェックもできます。アトピー性皮膚炎や尋常性乾癬の患者様への生物学的製剤の導入のきっかけを作る時間ができるので、紫外線治療器を導入してよかったと思っています。

また、ざ瘡の治療にも注力したかったため、ケミカルピーリングができる処置室も作り、従来の保険診療のざ瘡治療で満足がいかない患者様へお薦めできるようにしました。しかし、ざ瘡治療ではどうしても炎症後の赤みや毛細血管拡張が残ってしまうことがあり、どうにかしたい思いで、IPL（M22）を導入し、両頬のみ1万円のコースも設定して、赤みに悩む患者様への次なる一步を踏み出せるようにしました。保険診療は9割、自費診療は1割をモットーに日々診療にあたっておりますが、やはりIPLを導入してしまうと、患者様からしみやしわの質問を受けることが多くなり、それなりに最新の美容診療の情報を得ておかねばと考え、2023年から日本美容皮膚科学会に入会しました。美容の世界は奥深く、難しいのですが、正しい知識をもって診療ができるようにこれからも学んでいきたいと思っています。

最後に瀬谷区の紹介をいたします。瀬谷区は横浜市の最西端に位置し相模鉄道本線の瀬谷駅と三ツ境駅があります。2019年には相鉄・JR直通線が開業、2023年には相鉄・東急直通線が開業し、都内へのアクセスがとても便利になりました。2027年3月～9月には上瀬谷地区でGREEN×EXPO 2027(2027年国際園芸博覧会)が開催されます。ぜひ皆様、瀬谷に足を運んでいただけると幸いです。これからもどうぞよろしく願いいたします。

